

ボナテールのアヴェロンの野生児 (1)

鈴木光太郎

1 アヴェロンの野生児

アヴェロンの野生児とは、一八〇〇年一月南フランスのアヴェロン (Aveyron) 県で保護された推定年齢一二、三歳の少年のことである。発見当時は素裸で、ことばを発しも解しもせず、森のなかで数年間単身で過ごしていたものと推測された。七月まで、アヴェロン県の県庁所在地ロデス (Rodez) の中央学校で保護下におかれたあと、政府からの命令で八月にパリに移送され、人間観察家協会の監督のもとパリの国立聾啞学校に収容された。

少年は、精神医学の第一人者であったフィリップ・ピネル (Philippe Pinel) の診察・観察を受け、白痴と診断され、治療も教育も不能という判断が下された。その後、聾啞学校付きの医師になったジャン＝マルク・ガスパール・イタール (Jean-Marie Gaspard Itard) は、この少年をヴィクトール (Victor)⁽²⁾ と名づけ、その教育を思案し模索した。その記録は、一八〇一年と一八〇六年に報告書として提出・公刊された。⁽³⁾ 知的発達障害児への教育実践の克明な事例報告として、現在でも広く読まれている。

アヴェロンの野生児が巷間に知られているのには、フランソワ・トリュフォー (François Truffaut) の映画『野性の少年 (L'Enfant sauvage)』(一九六九年) も一役買っている。⁽⁴⁾ トリュフォーは、イタールの記録をほぼ

忠実になぞる形で、映画をイタールとヴィクトールの二人の関係の物語として描き出した。また最近では、アメリカの人気作家コラゲッサン・ボイル (T. Coraghessan Boyle) も、アヴェロンの野生児をテーマにした作品を書き、よく読まれている。⁵⁾

2 博物学者ボナテール

イタールの一八〇一年の第一報告の初めのほうの箇所には、次のようにある。

「科学の擁護者である某大臣は、この事件が精神的人間の科学に光明をもたらすに違いないと信じ、その少年をパリに連れてくるよう命じた。少年は、貧しくも尊敬に値する老人に連れられ、革命暦八年の末頃「一八〇〇年八月」⁶⁾パリに到着した。この子と別れなければならなくなった老人は、その子に、もし協会「人間観察家協会」がおまえを見捨てることがあったら、おまえを引き取りに来て、父親代わりになってやると約束した。」

この文中で、「貧しくも尊敬に値する老人 (un pauvre et respectable vieillard)」とあるのは、ロデスの中央学校⁷⁾の博物学 (自然史) の教授で、神父でもあったピエール・ジョゼフ・ボナテール (Pierre-Joseph Bonaterre) である (写真1参照)。イタールがなにを根拠に「貧しい」という形容を用いているのかは不明だが、この文章から受けとれるのは、人間愛にあふれた一介の老人 (この時ボナテールは四八歳だったので、この年齢が老人かという問題もあるが) が少年をパリまで移送したということである。なお、某大臣とは、ナポレオンの実弟、内務大臣のリュシアン・ボナバルト (Lucien Bonaparte) である。

しかし、ボナテールは一介の市民ではない。動植物の観察を専門にしてきた博物学者である。ボナテールは、この少年と五カ月半を一緒に過ごし、その観察記録を出版していた。後述するように、ピネルもイタール

た。しかし、報告の学術的価値を評価しようとするなら、彼がどのような経歴の持ち主であったかは重要である。以下にそれを見ておこう。

ボナテールは、一七五一年一月二四日、アヴェロン県のサンジュニエス・ドルト (Saint-Geniez-d'Or) に外科医の息子として生まれている⁹⁾。七二年に県都ロデスの神学校に入学。七九年神父となり、アヴェロン県のカッシュエジュール (Casselagnols) の助任司祭を命じられるが、博物学への想い断ちがたく、助任司祭をわずか数カ月務めただけで、学問の都パリに出る(奇しくも、彼の生年は『百科全書』の刊行が開始された年である)。パリでは、ドゥロクロール (Armand de Roquelaure) の庇護のもとで、フェヌロン (François Fénelon) の著作集の編集に勤み(一七八七年刊行)、『百科全書』執筆者のドーバントン (Louis Jean-Marie Daubenton) や博物学の権威ビュフォン (Comte de Buffon) とも親交を結んだ。

『百科全書』は一七五一年から七二年までに全二八巻が刊行され、新たなる知の普及に空前の成功を収めた。



写真1 ボナテールの肖像。
サン＝ジュニエス・ドルトの町役場に飾られている。Tap (1997) より。

も、この報告に重きをおくことはなかった。しかし、この報告は、パリに移送される以前の(すなわちピネルの診断やイタールの教育・訓練がなされる以前の)少年の行動、性質や能力が書き記されているという点で注目すべき資料である。

ボナテールについても、これまではロデスの中央学校教授で博物学者という紹介のみで、それ以上の解説はなされてこなかった。

パリの出版業者、パンクーク (Panckoucke) は、『百科全書』を拡張した後継のシリーズとして『系統的百科全書 (Encyclopédie méthodique)』を企画した。このシリーズは、一七八二年から刊行が開始され、一八三二年まで二一〇巻が刊行された。この姉妹編として(あるいは一部として)刊行されたのが『系統的百科図鑑 (Tableau encyclopédique et méthodique)』である。動物、植物、鉱物をあつかったこのシリーズは、一七八八年から刊行が開始され、九二年まで刊行された。このシリーズの執筆陣には、ドーバントンやラマルク (Jean-Baptiste Lamarck) もいた。ボナテールは、鳥類、爬虫類、両生類、魚類などの分類と記述を担当した。彼の執筆した分量は、フォリオ判で図版ページも含めると二〇〇〇ページを超え、その執筆の過程で二五種の新種の魚も発見している。『百科全書』研究の第一人者、ドイグ (Kathleen Hardesiy Doig) は、ボナテールを『百科全書』以上に新たな知見を導入したと高く評価している。¹¹⁾

『系統的百科図鑑』の出版が一七九二年で終了するのは、フランス革命が大きな混乱の時期に入りつつあったことも関係している。この年、ボナテール(彼は神父でもあった)は身の危険を感じて、故郷サンジュニエスに戻って身を隠した。九四年熱月のクーデタによって恐怖政治が終わりを告げ、九五年一二月、彼はサンジュニエスの教育委員会の委員となった。九六年にはロデスに植物園を創設し、次いで九七年五月からロデスの中央学校の教授を務めた。

アヴェロンの野生児に関わるのは、この中央学校時代の、一八〇〇年の二月から八月までの七カ月間である。この四年後、ボナテールは肝臓を患い、一八〇四年九月二日に故郷のサンジュニエス・ドルトにて亡くなった。五二歳であった。

3 発見・捕獲からパリへの移送まで

ボナテールの報告の時間的位置づけをより明確にするために、この野生児の発見、捕獲・保護からパリで人間観察協会に引き渡されるまでの出来事を、時系列に沿って見ておくことにしよう。

少年は、一七九四年か九五年頃にタルン(Tarn)県のラコーヌ(Lacauze)の森に遺棄されたと見られる。というのは、ちょうどこの頃から、この少年と思しき存在がこの近辺で目撃されているからである。最初の捕獲は九七年三月、このラコーヌの森であった。しかし少年はその後逃走し、二年ほど近隣の村や森を放浪した。

二度目の捕獲は九九年の七月中旬である。この時には、ある家に八日間いただけで、また逃げてしまう。

再度姿を現わしたのは、一八〇〇年一月九日、隣のアヴェロン県のサンセルナン(Saint-Sernin)村のヴィダル(Vidal)という名の染色業者の家であった。ヴィダルが少年を保護しているという知らせを聞いた郡長(政府委員)のコンスタン・サンテステーヴ(Constans Saint-Estève)は、少年をサンタフリック(Saint-Attrique)の養護院に移送して保護し、そのことを県の中央政府に知らせる。数週間後には、野生児発見のニュースはフランス中に広まっていた。

このニュースを聞き、少年に強い関心を抱いたボナテールは、アヴェロン県の中央委員にはたらきかけ、この少年をロデスに移送させることに成功する。少年は二月四日にロデスに到着した。少年は、七月二〇日までの五カ月半の間、中央学校でボナテールのもとで暮らした(写真2参照)。

この少年に学術的に強い関心を抱いたのは、当然ながらボナテールだけではなかった。ピネル、ビュフォンやシカール(Roch-Ambroise Cucurron Sicard)など錚々たる面々からなるパリの人間観察協会もそうであった。この協会は、すでに一月の時点で少年をパリまで移送して、その保護と教育を協会に任せるよう、内務大臣の



写真2 ロデスの中央学校。

1900年頃にリセとして使われていた頃の写真であるが、建物は1800年当時と同じもの。Belsler (2012) より。

リュシアン・ボナパルトにはたらきかけていた。一月二九日には、協会のジョフレ (Louis-François Jauffret) からサンタフリックの養護院の院長にあてて、また二月一日には、リュシアンから直接アヴェロン県の中央政府にあてて、もしニュースで言われていることが本当なら、少年をパリに移送するよう依頼の文書が送られている。しかし、アヴェロン県の関係者は、この依頼にはすぐ応えることをせず、少年はロデスの中央学校で保護して観察中であり、少年の状態が落ち着いてパリまでの長旅に耐えられるようになり次第移送する旨の返事を返した。人間観察家協会は、数カ月経っても少年が移送されたくないことに痺れを切らし、ついに六月二三日付で、リュシアンから県知事にあてて少年の移送の強い調子の要請の文書が送られた。これ以上少年の移送を遅らすことはできなかった。

パリに向けての出発は七月二〇日である。ボナテールは少年を連れ、それまで少年の世話にあたっていた中央学校の庭師、クレール・ソーソル (Clair Saussoil) を従えて、馬車を乗り継ぎ、一八日をかけ (少年が麻疹にかかったため、リヨンに一〇日間逗留している)¹³、八月六日の夜二〇時にパリに到着した。

パリでは、その到着を市民たちが首を長くして待ち構えていた。これは、アヴェロンの野生児の発見以来半年にわたって、新聞がこの少年のことを書き立てていたからだけではない。パリでは、三月以来この少年を題材にした喜劇がかかっている、好評を博していた。¹⁴ その日は夜にもかかわらず、街は、その実物をこの目で見

ようと集まった野次馬たちの熱狂と興奮に包まれた。もちろん、少年はパリの知識人たち（その代表とも言えるのが人間観察家協会であった）にとっても大きな関心事だった。ルソー（Jean-Jacques Rousseau）やコンディヤック（Etienne Bonnot de Condillac）などが問題にした「自然人（l'homme naturel）」や「野生人（l'homme sauvage）」の一例を観察する機会にもなったからである。¹⁵⁾

一行は、八月三〇日には内務大臣のリュシアン・ボナパルトに謁見した。リュシアンは、三〇分にわたって少年を観察した。九月二日、少年は、人間観察家協会のメンバーで、国立聾啞学校の校長でもあったシカールに正式に引き渡された。

4 ボナテールの報告

ボナテールの報告『アヴェロンの野生児等に関する歴史的概略』は、一八〇〇年九月、全五〇ページの冊子としてパリで出版された（写真3参照）。報告の主要部分はロデスで書かれ、リヨン逗留中に最終的な形にまとめられたと考えられる（報告の途中には現時点が七月三一日という註があり、これは少年をパリへの移送途中リヨンに逗留中の時期に相当すると推測されるからである）。この冊子の出版元は、『系統的百科図鑑』を出していたパンクークであった。ボナテールは、一〇月七日までパリに滞在していたので、刷り上がったばかりのこの冊子をパリで受け取ったものと考えられる。

この五〇ページ中、前半では、これまでに発見された野生児の一一の事例（たとえば一六六一年にリトニアの森でクマと一緒にいるところを発見された少年や、一七三一年にシャンパーニュのシャロンで発見された少女など）についての報告に言及し、後半でアヴェロンの野生児について述べている。

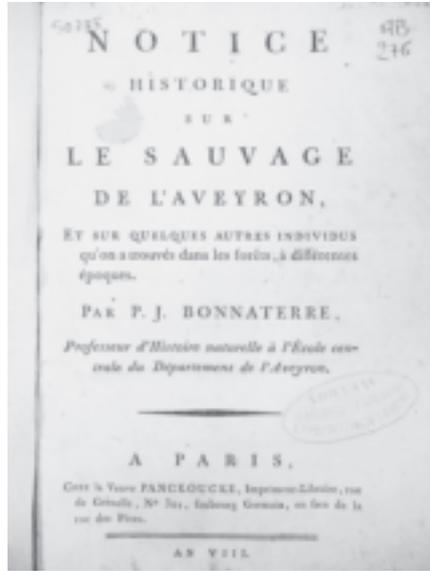


写真3 ボナテールの報告『アヴェロンの野生児等に関する歴史的概略』（1800）の表紙。アヴェロン県立文書館蔵。

の対象が、十分に詳細な細部と、不確かさを払拭できるだけの正確さをもって伝えられていないからである。それらは、事典や新聞、文学作品のなかから集められた曖昧な概略でしかない。

精神医学の権威として、ピネルがこのような評価を下すのも、わからないでもない。というのは、ボナテールの報告は、題目に「歴史的概略 (Notice historique)」と謳っているように、それまでの歴史的（ある意味では逸話的）な野生児の事例に触れたあとで、アヴェロンの野生児との比較を行なっているからである。このような提示のしかたは、ピネルには、アヴェロンの野生児の記述も、ほかと同じく実証的な証拠に欠けるように映った。しかし、アヴェロンの野生児の部分に限って言えば、ボナテール自身が実際に観察した出来事の記述であり、ほかの事例の紹介とは区別されてしかるべきである。¹⁷⁾

以下に訳出するのは、その報告の二一〜四八ページのアヴェロンの野生児についての部分である。¹⁸⁾この部分

ボナテールの報告は、アヴェロンの野生児の発見、初期の保護・養育について記している点で本来なら重要と考えられてしかるべきだが、この野生児に最初の医学的診断を下したピネルは、この報告を「とりあげるに値しないもの」と黙殺した（イタールもほぼそれに倣い、重要視はしていない）。ピネルは、人間観察家協会への報告のなかで、次のように記している。¹⁶⁾

「ここでは、ボナテールの報告について論議はしないことにする。この博物学者がとった比較

を読むかぎりでは、ロデスでの生活は少年にとって比較的平穩だったようだ。周囲の者は少年に馴れ、少年もまわりの人間的環境に適応しかけていた。

しかし、パリへの移送後は、少年は、まったく知らない人間たちのなかにおかれた。彼を收容した聾啞学校には、最初は彼を見ようと見物人たちが引きも切らなかつた。だが、見物人のほとんどは、実際のアヴェロンの野生児が彼らの想像したものとまったく異なることに失望した。聾啞学校の校長のシカールもそうであった。¹⁹シカールは少年を放置し、少年に対する虐待も起こつた。このような期間が三カ月から四カ月続いた。おそらく、少年はまわりの人間との最小限のコミュニケーションすらもとろうとはしなくなつていた。イタールが少年の教育を担当するのは、このあとのことである。

アヴェロンの野生児

太陽と雨が与えるもの、大地自体がもたらすもの、彼の飢えを鎮めるにはそれで十分なりし。(ルクレチウス)

三年半前「原註 現在は共和暦八年熱月一三日(一八〇〇年七月三一日)」、タルン県の、ラコーヌの森のラバシーヌという場所で、真つ裸の子どもが目撃された。人が近づいたところ、それに気づいて逃げた。この思いがけない遭遇が人々の関心と好奇心を掻き立てた。翌日以降、人々は、同じ時刻に森のなかの開けた場所で待ち伏せをした。隠れてじつと待っていたところ、この子が木の実や根を食べるために採りに来たところが目撃された。

この知らせはこの地域一体に広まり、何人かがこの驚くべき存在を探しに行くことにした。彼らはこの子に遭遇したが、動きがすばしっこく、難儀しながらやつのことで彼をつかまえた。しかし間もなく逃げて、森に帰ってしまった。

最初の逃走から一五カ月経った共和暦七年の収穫月の終わり「一七九九年七月中旬」に、ラコーヌの三人の獵師が同じ森のなかで彼を見つけた。彼らを見るや、彼は逃げようとして、木に登った。しかしこれでは、獵師の追跡の手を逃れることはできなかつた。木から落ちた彼を獵師が受けとめ、ラコーヌに連れて来られた。この時から、彼は人間社会に入り、その生活の最初の変化が始まつた。

獵師につかまつた時、彼は真つ裸の状態だつた。そこで衣服が着せられた。彼はそれまで、なまのドングリ、ジャガイモ、クリを食べて生きていた。ライ麦パンが与えられ、ジャガイモやほかの食べ物を火で調理することが教え込まれた。

しかしながら、彼にはこの新たな種類の生活よりも自由のほうがよかつたようだ。ラコーヌではある寡婦の家に八日とどまつただけで、また逃げ出した。しかし、森へ逃げるのではなく、半径四〇キロの範囲内で、山を放浪し、この地方のいくつもの集落を歩き回つた。だが、夜間に集落に現われることはなかつた。昼間によく姿を見せた村や集落にしても、三〇分以上いることはめつたになかつた。こうして、冬の厳しい寒さにさらされながら、六カ月以上もの間放浪して過ごしていた。

数日來天候が和らいだ雪月一九日「一月九日」、朝の七時に、サンセルナンの、市街の外八〇〇メートルの距離に住んでいた染色業者のヴィダル氏のところにこの子が現われた。彼は、頭も腕も足のむき出しで、ぼろぼろになつたシャツしか身につけていなかった。それは、六カ月前にラコーヌで着せられたシャツだつた。

コンスタン・サンテステーヴ氏によると、

「このニュースは、たちまち村中に知れ渡り、この野生児を見ようと黒山の人ばかりができた。私もすぐに駆けつけ、噂にどの程度信憑性があるのかを確かめようとした。子どもは暖かな火のそばに楽しそうに座っていた

が、おそらくまわりにたくさんの人がいるせいで、時折不安な様子を見せた。私は無言でしばらく少年を観察したあと、話しかけてみて、すぐに少年が唾者であることがわかった。それから私は、声を大きくしたり低くしたりして、少年にいろいろ質問を試みたが、彼がなんの反応も示さないで、聾者に違いないと思った。

私は、少年を私の家に連れてゆくためにやさしく手を引いたが、彼は激しく抵抗した。けれども、繰り返しなでてやり、とくに二度親しみをこめて微笑みながら抱きしめてやると、すぐに抵抗を止め、それからは私を信頼しているように見えた。

家に着いた時、彼が腹をすかしているようだったので、食べ物を彼に与えることにした。家までの道すがら、ほかの人が教えてくれたのは、その子が根やほかの野菜をなまで食べるということだった。これを確認するため、彼の食べ物の好みを知るために、私は、陶器の大きな皿の上に、生肉と煮た肉、ライ麦パンと小麦パン、リンゴ、ナシ、ブドウ、木の実、クルミ、クリの実、ドングリ、ジャガイモ、白ニンジン、それにミカンを並べて、彼に差し出した。少年は、自信をもってジャガイモをつかみ、火の真ん中に放り込んで焼いた。ほかの食べ物は、ひとつずつかんで、匂いを嗅いだが食べなかった。そこで私は、使用人にジャガイモをたくさんもってこさせた。彼は、ジャガイモの山を見て喜び、両手でつかむと火に放り込んだ。少しして、燃えている石炭のなかから右手でジャガイモをつかみだし、火傷するほど熱いまま食べた。少し冷ましてから食べさせようとしても、言うことをきかなかった。焼けるような熱さを感じて、発音の不明瞭な鋭い声をあげて痛みを表現したが、不服を言っているふうではなかった。喉が渇くと、視線を右往左往させ、水差しを見つけると、なにも言わずに私の手を取り、水差しのところ连接到ゆき、水が飲みたいということを示すために、左手で水差しを叩いた。ブドウ酒を出してみたが、一顧だにせず、すぐに水を飲ませてくれないことに苛立ちを示した。

質素な食事が済むと、少年は立ち上がって、逃げ出そうと入口に向かって走り出した。私がいくら叫んでも止

まらなかつたので、つかまえるのに苦労した。連れ戻されても、嫌だというしぐさも、嬉しいというしぐさも示さなかつた。私はすでに、この不幸な存在に強い関心を抱くようになっていた。パンや肉を嫌うこと、ジャガイモが好物であること、差し出されたドングリを見た時に——そしてそれをずっと手に持っている時に——彼が示す一種の喜びの感情、なにもなくても通常は満足気だったが、時折、野外に出ることができないことに不満気な様子を示すことなどから、私は、この子がかなり幼い頃から森のなかで、社会的欲求や社会的習慣とは無関係の状態で暮らしてきたと判断した。」

雪月二〇日「一月一〇日」、この少年はサンセルナンからサンタフリックの養護院へと移された。ギロー氏の書いているところによると、サンタフリックに到着した時には、彼は「哑者同然」で、声をまったく発しなかつた。一五日後、舌は少しほぐれてきたようで、叫び声をあげた。

高地での野外の冬の厳しい寒さに慣れていたせいか、この子は、どんな種類の衣服も着るのを嫌がった。衣服を着せるとたちまちにそれを脱ぎ、脱げない時にはそれを引き裂いた。頭を覆うためには、はぎとれないように顎の下のところで紐を結ぶ小児用の帽子を被せなければならなかつた。

養護院に到着した時には、彼はベッドで寝るのをとても嫌がった。しかし徐々にそれにも慣れ、その後シーツを取り替える時には、大きな喜びを示すようになった。

最初の頃は、なまのジャガイモ、クルミ、なまのクリだけしか食べなかつたが、最後の頃には、黒パンを浸したスープも食べるようになっていた。しかし、いずれの場合も、サルがそうするように、そのにおいを嗅いでからでないと食べなかつた。

サンタフリックでの滞在の間、彼の生活は、森のなかで生活していた頃に比べると、心地よく、辛くはないはずだっ

た。しかし、彼は人間社会から逃げようとし、人里離れたところに戻ろうとした。二度ほど逃走したが、彼をつかまえるのは至難のわざだった。それを目撃した養護院の院長、ヌーゲロル氏が私に語ってくれたところでは、野原を追いかけられつかまった時には、手を地面につき、四足で歩いていったという。

この子が養護院に来て数日経った頃には、彼の噂はフランス中に広まっていた。いつものことながら、その噂には、驚くような尾ひれがつけられていた。ある者は、彼がクマのように毛に被われていると言い、別の者は、アヒルのように泳ぎ水中に潜ると言い、また別の者たちは、リスのように木から木へと飛び移ると言った。

いくつもの新聞が彼のことを伝え、パリ中では「アヴェロンの野生児」の話題で持ち切りになった。しかし、アヴェロン県の中央政府は、彼についての正式な報告を受け取っていなかった。

私は、これらの噂にどれだけの真実があるのかを知りたくて矢も盾もたまらなくなって、兩月三日「二月二四日」に、中央委員の執務室を訪ねた。天候は最悪だったが、その子——その子の風聞はすでにフランス中を飛び交っていた——に会って調べてみるために、サンタフリックにただちに赴きたいと願った。中央委員のランドン氏「原註 現在ミヨール県の副知事」は、みなもそれを知りたがっていたので熱意をもって、サンセルナンの委員にあてて、その子について確実な情報を送って寄こすように、そしてその子がまだ彼のところにいるのなら、ロデスに移送するよう、手紙を書いてくれた。

兩月一五日「二月四日」の午後三時、彼は、おびたらしい群衆に取り囲まれながら、ロデスに到着した。彼は、これらの群衆をひじょうに不快に感じたようで、自分に近づきすぎた者にはみな歯で噛みついた。県の中央政府はすぐに、私にこの子を担当するよう、そして彼についてその後の決定が下されるまで、彼に必要なことをすべてしてやるように依頼したいという手紙を寄こした。

その後すぐに、内務大臣からアヴェロン県の中央政府に、この子をパリに連れて来るよう命令が下された。しかし、

さまざまな事情から、この移送は延期せざるをえなかった。照会した情報については、まだなんの知らせもなかった。私たちはまだこの子の知的能力について知らなかったし、彼がどのような素性の子かもわからなかった。私たちは、だがそれがその少年が自分の子だと名乗り出てくるだろうと思っていた。もしその時に彼に会えなければ、どのようにして彼の身元を確認することができるだろう？

実際、この時以来、その子と同じ年齢ぐらいの行方不明の子をもつ、悲嘆に暮れる二人の父親が続けて確認のためにやってきた（ひとりは一七九三年のロゼールの反乱の際に、もうひとりはトゥーロンの要塞が攻撃中行方不明になった子どもの親であった）。彼を調べてみて、両者とも、その少年は自分の子ではないと言った。「原註 これら不幸な父親のひとりはロゼール県マルヴジヨル在住、もうひとりはトゥールーズ在住である。」

身元についての推測

信頼できる筋の人たちから私のところに送られてきた最近の報告書と某郡に広まっている噂によると、この少年は、M在住のD・Mという人の子どもである。この子は嫡出子であったが、冷酷非情な両親は、彼にことばの能力が身につかなかつたため六歳頃に彼を遺棄したのだという。報告には、乾いた木の葉を集めて寝床にして夜をすごす場所の記載があったし、彼がジャガイモやカブを探しに行く畑や庭や、彼が食べるドングリを提供するコナラの木についても記されていた。

以上が、この不幸な子の身元についてこれまで集まった情報の概要である。実のところ、私たちは、その出生地や、森に連れて来られた理由についてこれといった推測ができるだけである。しかし、サンセルナンやサンタフリックの委員からの報告や信頼できる人々の証言が示すところによれば、それに彼の好み、習性や生活習慣が示しているように、彼はかなりの期間、森のなかで動物のように自然状態で生活していたように思われる。

外見

この子は、見かけはほかの子どもととくに違うところはない。身長は一三六センチで、一二歳か一三歳ぐらいに見える。肌は白くきめ細かで、顔は丸い。目の色は黒く、奥目で、まつげが長い。髪は栗毛で、鼻は長く、少し尖っている。口は平均的な形で、丸い顎をしている。端正な顔立ちをしており、笑顔には愛嬌がある。

舌はよく動き、奇形は見当たらない。

下顎の歯は、歯茎がむき出して、根元が黄ばんでいる。

身体全体が傷跡だらけである。この大部分は火傷でできたものようである。

傷は、右の眉にひとつ、右の頬の中央にひとつある。あごにも、左の頬にもひとつずつある。

頭を反らすと、気管の上端あたり、ちょうど声門のところに四一ミリの長さの古傷が見られる。なにか鋭利な刃物で切られてできた傷のようだ。この子を森に連れて行ったあと、野蛮な人間の手が、この子の失踪をより確実に完全なものにするために、殺人用の刃物を彼に向けたのではないだろうか。

彼の左腕全体、すなわち肩甲骨と上腕骨が合わさるあたりから前腕の中央にかけて、六つの大きな傷跡が見られる。

右側の肩甲骨に近い肩の部分には小さい傷痕が数カ所あり、また同じ側の鼠径部にも大きい傷痕がひとつある。さらに恥丘の上に二、三カ所、両脚や左の尻にも数カ所あり、そのうちひとつは円形をしていて深い傷痕である。

たとえこれらの多数の傷痕が、彼の受けたひどい扱いや彼を殺そうとした企てを示す明確な証拠ではないにしても、少なくとも、これらは、彼が森のなかで生活している間、衣服をまったく身につけていなかったこと、したがって彼の身体が動物の攻撃や植物の鋭い棘や岩の尖端や深い藪に対してまったく無防備であり、傷ついた可能性があることを示している。

傷痕はひどいものだったが、基本的に外的な奇形は見当たらなかった。右膝が内転し、脚は外転しているため、歩行

は安定せずふらついているが、これはおそらく、彼がこれまで経験した湿気と酷寒によるリウマチ性疾患のせいだろう。座っている時には、また食事の時も、彼は喉から声——くぐもった眩き——を發した。座っている時には、身体を左右前後に揺すつた。この時には頭を上げ、口を閉じ、あごを出し、宙を見つめていた。この姿勢で、彼は時々痙攣發作を起こすことがあつた。このことは、神経系に異常があることをうかがさせた。

感覚

一方、彼の諸器官は良好な状態にあり、感覚も全般的に問題がない。自分に向けられた叫びや質問に対して目を向けも振り向きもしないため、彼が聾だと思つた人たちもいた。しかし、彼の耳は、見かけは正常であるものの、發話に障害があるために、ほとんど役に立っていない可能性がある。人間の場合、發話は聴覚に依存し、耳はコミュニケーションの器官であると同時に、聴覚を活性化するが、この少年の場合、聴覚はほぼ完全に受動的であり、ことばとはまったく結びついていない。

一般に、ある感覚が優位でなくなつてしまつた人間は、ほかの感覚の優位を獲得する。同様に、目の見えない人が見える人よりも聴覚や触覚にすぐれていることは、私たちの知るところである。これは、自然がその人間の利益になるように感覚の鋭敏さを合わせるようになったからなのかもしれないし、その利益のゆえにそれらの感覚を頻繁に使うことでより完全なものになつたからなのかもしれない。これが真実であることは、いま述べている事例でも確認される。この少年は、そのような生活のゆえに動物に近く、人間との共通性が少ないために、食欲に関係する嗅覚と味覚が、その使用を通してよく發達し、完璧さを備えるようになったのだろう。自分に合うか合わないかを知るために、彼はつねに嗅覚を用いる。出されたものを食べるか拒むかの判断は、匂いを嗅ぐことによつてゐる。

味覚は内部的な嗅覚であり、それゆえほかのどの感覚よりも食べることに関係しているので、この少年は、文明人よ

り確実で繊細で洗練された味覚をもっていると考えられる。この推測は、彼が特定の食べ物に対して徹底した嫌悪を示すことや、自分に合った食べ物を間違えずに選ぶことにもとづいている。

対象の鮮明、明瞭かつ正確な知覚は、視覚器官の完成度に依存するが、その点ではこの野生児は、整った形の眼をしているので、すぐれた視覚を有していると言える。しかし、食べ物についての彼の視覚的判断は、嗅覚器官によって修正される必要があるもので、それだけでは確かさをもちえず、嗅覚の助けを借りないかぎり知識として使えない。同様に、この少年の視覚は、判断の点から考えた場合、社会のなかで生きている個人のそれよりも不完全であり、別の言い方をすると、完成度が低い。

高い知性を備えた人間では、触覚が第一位の座を占める。というのは、それが思考や理解にもっとも関係する感覚だからである。しかし、知的能力の限られた白痴に近い存在にあつては、なにかを知るよりも食欲を満たすほうを優先し、触覚が下位に位置づけられる。

したがって、観察の対象であるこの野生児においては、自然が次のような感覚の順位を形成しているように見える。すなわち、嗅覚が第一位で、もっとも完璧であり、味覚が第二位だが、むしろこの二つの感覚はひとつのものを成しているともみなすべきかもしれない。視覚が第三位、聴覚が第四位で、触覚が最下位である。感覚作用も、同じような順位になる。すなわち、少年は、嗅覚の印象によってもっとも動かされ、彼の判断や決定のもっとも大きな部分は、この優位な感覚作用にもとづいている。ほかの感覚作用は、それに比べると弱く、頻度も少なく、嗅覚に従属し、この少年の性質に副次的な影響しか与えない。

言語能力の欠落

人間の性質のなかに人間本来の特性を見分けようとし、自然と人為とを分ける線を引こうと試みるなかで、一部の著

者たちは、原始的な状態の人間を、純粹に動物的な感覺能力だけをもった存在として——人間を動物よりも優位にする能力を使わず、自分の感情を伝える手段ももたず、考えを表現するのに適切な音声やしぐさをまったく欠いた存在として——描いてきた。私たちの野生児は、これらの推測を部分的に裏づけている。実のところ、彼は、自分の要求を伝えるために、彼が社会に入ってから覚えたわずかな身振り（要求を満たすことを可能にする手段）を用いたが、話す能力をまったく欠いており、叫びや不明瞭な音声しか発することができなかった。それは、発声器官の奇形なのかもしれないし、声門近くに負った傷のせいなのかもしれない。しかし、かつては彼が喋っていたことがあるとしても、ほかの人間とのコミュニケーションのない状態で長期間過ごしてきたために、ことばを使うという能力が失われてしまったのだろう。砂漠で父親と一緒に暮らし、その後数年して発見されたカリフォルニアの一二歳の少年は、母国語をほんの少ししか知らず、しかもその少しでさえまったく不完全なものであり、母国語についての知識はほんの教語に限られていた。スコットランド人のセルカークは、ファン・フェルナンデス島で五年間ひとりきりで暮らしたあとには、ことばを忘れ、話す能力さえ失っていた。

本能

この少年は、自然によってもっぱら本能に委ねられており、純粹に動物的な機能だけを使う。すなわち、彼は、本来なら自然な欲求と同じぐらいに緊急であるはずの人工的な欲求、慣習的欲求を知らない。彼の欲望は身体的欲求を超えることがない。この世で彼が知る幸福とは、食事と休息と放縦だけである。彼が生きてきた年月は、生けるすべての存在を悩ませると同時に不滅にするあの激しい感情を發達させることはなかった。彼は、愛の感情をまだ経験したことがなかった。したがって、彼のすべての感覺作用は、自分に必要な食べ物、自由の魅力、休息の喜びを手に入れることだけに結びついている。たとえ彼がなんらかの知識を示したとしても、その知識は、自分の命を維持する手段でしかない。

たとえなんらかの理性的原理が彼の行為のなかに認められたとしても、彼はそれを自分自身の要求にしか使わない。彼がなんらかの記憶の痕跡をもっているように見えたとしても、彼はそれを自分自身の生存に関わるものには使わない。ほかの人間との関係を絶たれた人間の心は、訓練も教育もほとんどなされないため、外的なものによって強制されてしかたなく思考する。人間の知識のもっとも豊かな源泉は、人間どうしの関係のなかにある。

彼の愛情は、理解と同様、限られている。彼が愛情を示す人はおらず、だれにも愛着をもっていない。もし彼が自分を世話してくれる人になんらかの好みを示すことがあっても、それは要求の表現であって、感謝の感情の表われではない。彼がその人に付き従うのは、その人が彼の要求を満たすよう、そして彼の食欲を満足させるよう務めるからである。もっとも鋭い叫びも、もっともハーモニアスな楽器の音色も、彼の聴覚にはなんの印象も与えない。あるいは少なくとも、彼にはそれらが感じられないようだ。彼の近くで音がしても、それが聞こえているという素振りは見られない。しかし、好物の食べ物が入っている戸棚を開けた時や、背後で彼の大好きなクルミを割った時には、それらの音は、ただちに聴覚器官をとらえ、彼はそれらの食べ物をとろうとして音のした方向に顔を向けた。

食べ物

人間社会に入った時に彼を調べた人々は異口同音に、彼がパン、肉、スープを極度に嫌い、ジャガイモ、なまのクリとドングリシか食べなかったと言っている。ラコーヌ滞在中、共和暦七年収穫月の終わり「一七九九年七月中旬」に、彼はジャガイモに火を通すことを学び、それ以来、ジャガイモは火を通してからでないと食べなかった。

ライ麦パン、スープ、インゲン豆とクルミを食べるようになったのは、サンタフリックに移ってからである。

ロデスに連れて来られた当初は、焼いてあるか半焼きのジャガイモ、なまのクリの実、クルミしか食べなかったが、その後ライ麦パンやスープも食べるようになった。草月「五月下旬―六月中旬」には、肉に対する強い好みを示し、な

までも焼いてでも、関係なく食べた。現在、彼がもつとも好む食べ物は、エンドウ豆、ソラ豆とクルミである。

食べ物に対するこうした絶え間ない欲求は、まわりにあるものとの彼の結びつきを強め、ある程度の知性を育てている。ロデスに滞在中、少年のした唯一の仕事はインゲン豆の莢をむくことで、経験のある人と同じように能率的にやっていた。これらの豆が自分の食事にいつも出るものと知っていたので、干した豆の莢の束が目につくとすぐに鍋を取りにいった。仕事をする時は部屋の真ん中に陣取り、そのために必要ないろいろな道具をできるだけ便利な位置に並べた。鍋は自分の右に、豆の莢は左に置き、信じがたいほどの器用さで、莢を次々と開けていった。かびの生えたのや端の黒くなっているのをよけて、いい豆だけを鍋に入れた。ひとつでも豆が横へ飛ぶと、探しては拾い上げ、ほかの豆と一緒にした。空になった莢は自分のそばにきちんと積み重ねた。仕事をし終えると、鍋のなかへ水を入れ火をかけたが、その火は彼が乾いた豆の莢でおこしたものであった。火が燃え尽きると、シャベルを持ってきてクレール〔原註〕彼の世話をしていた男で、バリへも同行した」に渡したが、これは燃えている石炭を近所からもらって来てくれという合図であった。鍋が沸騰してくると、すぐ食べたいという様子を示した。そして生煮えの豆を自分の皿によそわないと承知せず、よそうとそれを食るように食べた。

彼は、ジャガイモ入りのスープを食べたい時には、一番大きそうなジャガイモをいくつか選んで、台所で最初に目にした人間にもって行き、包丁を差し出して、切ってもらった。次にフライパンをとりに行き、食用油の入った戸棚を指し示した。

風月の末「三月中旬」頃、彼にソーセージを与えたところ、彼はいつものように嗅いでみてから、食るように食べた。翌日、少年のいる部屋で食事していたアヴェロンの補助部隊の指揮官が、皿の上の大きなソーセージから切りとった一切れを彼に示して、とりにくるよう合図した。彼は、その申し出を受け入れて近づくと、左手で、指揮官の指の間にはさまれた一切れをとり、同時に右手で、皿にあったソーセージの残りを器用にとった。

田舎の生活が彼にどのような印象を与えるのかを見るために、私はロデスから少し離れたオランのロダ氏のところに彼を連れて行ったことがある。彼を歓迎すべく、インゲン豆、ジャガイモ、クリとクルミが用意されていた。食べ物の豊富さが彼を大いに喜ばせた。彼は、まわりの人間たちに目もくれずに、インゲン豆をつかんで鍋のなかに入れ、そこに水を注いで、それを火のところにもっていった。シャベルを使って炭火を広げると、そこにジャガイモを放り込み、ロダ氏の妹を自分のそばに引き止め、料理をするのを手伝わせた。待っている間に、彼はクルミとクリの実をもらって、まもなくジャガイモとインゲン豆が食べられるようになり、お腹いっぱい食べると、残ったものはベチコートに入れて、庭に出ると、食べ物がない時に備えて動物がするように、それらを隠し土のなかに埋めた。おそらくは、必要な時にそれらを取り出すためだった。

しばらくまえから、台所に入った時には、急いで炉やかまどのところに行き、火のまわりにおかれたすべての壺を点検するのが習慣になっている。蓋を次々と開けてみて、肉入りのスープを見つけた場合には、そこにパンを浸し、それをそのまま口にもっていった。しかし、この食いしんぼの行為は、世話をしている女性から厳しく止められたので、彼は、その監視の目を逃れようとし、彼女がほかの仕事に注意を逸らす瞬間をねらって、パンを壺に浸した。私はある日に、彼が気づかれることなく、六回そうするのを見たことがあった。

パリまでの旅の際には、私たちは、用心して、リュックサックのなかに、少量ではあるが、ライ麦パン、ジャガイモ、インゲン豆とクルミを入れていた。これは、宿屋にこれらの食料がおいでない時のことを考えたためと、すぐに出発しなければならなくなつて、料理の時間がないことも考えたためである。少年は、リュックに自分の食べ物が入っていることを知っていたので、リュックにはとくに注意を払っていた。座っている時には、つねにそれを自分のそばにおいていた。馬車を乗り換える時、あるいは馬車が宿屋に着いた時には、彼はドアのまえで止まり、もつとも愛着のあるそのリュックのあとからでないかと、なかに入ろうとしなかった。

彼に初めて鏡を見せた時、彼はすぐに、鏡のなかに見えている子どもがいると思つて、鏡の後ろにまわつた。この同じ時に、彼の脇で、鏡から彼より遠くにいた若者が彼にジャガイモを差し出した。彼は、待ち切れずに、差し出された食べ物をつかもうと、鏡に向かつて手を差し出した。しかし、手が届くと思つた標的からかえつて遠くなつてしまったことに気づくと、頭の向きを変えることなく、手をななめ後ろにもつてゆき、手はちょうどそのジャガイモを差し出していた若者にあたつた。

白痴状態についての疑い

これらの詳細すべて、そして付け加えることのできるほかの多くのことから、この少年に知性、思考能力や推理能力がないわけではないことがわかる。しかしながら、彼の自然の欲求を満たし食欲を満足させることが問題となる場合を除いては、彼の行動は動物そのものだと言わざるをえない。感覚はあつても、それが観念を呼び起こすことはないし、感覚どうしを比較するだけの能力もない。彼の魂と身体の間にはいかなる呼応関係もないようだし、なにについても熟考することがないようだ。すなわち、彼には分別も、精神も、記憶もない。こうした白痴状態は、彼の視線に現われている。彼はひとつのものを凝視するということがない。出す声も、不明瞭な不協和音で、それを昼も夜も発していた。歩くのは、つねに速足か駆け足である。動きについても、目的も意図も感じられなかつた。

性質

この少年は、なでられたりさすられたりすると、おとなしく愛想よくなる。手招きをすると、近寄つてくる。彼に手を差し出すと、ちょうどサルのように、彼も手を差し出して、すぐに引つ込めた。一方、彼が苛立っている時や、邪魔された時には、逆上や激怒を全身で示し、その時には突然腕や脚や頭を揺り動かし、両手の握りこぶしを目にあて、頭

を激しく振った。同時に、悔しさを示す叫び声をあげ、時には、彼を怒らせた人間に軽く噛みつくこともあった。

日常生活

森のなかでこの子が身につけた種類の生活習慣を急に改めるといのは、おそらくすべきではなかった。「シヤロンの少女」がそうだったように、あまりに突然の変化は、破壊的に作用するか、あるいは少なくとも彼の健康を損なう可能性があった。そこで、両月一五日「二月四日」以降、彼には自由にその気性と好みのままにさせることにした。

自由を享受し、しかも好物の食べ物が入るようになったにもかかわらず、彼はたえず逃げようとし、戸が開いていると、逃走の機会をつねにうかがっていた。ロデスからすでに四回か五回逃走していたが、そのたびに幸いにして連れ戻された。つかまえられた場所はロデスからかなり離れていることが多かった。旅行中も何度か逃走を企てたが、すべて失敗に終わった。

火の存在はつねに彼に心地よさをもたらした。手をさかんに動かして喜びを表現し、大声で笑い、暖かさをよく感じるためにペチコートをベルトのところまでまくり上げた。人から大声で「お行儀が悪い！」と言われると、すぐにペチコートを膝まで下げるが、少し経つとそれをまたまくり上げた。

暖まることに対する彼の強い欲求と、火のそばにいる時に彼が示す喜びから、私は、この少年が、言われているように、私たちにとってさえ厳しい冬の間真っ裸の状態で生活していたというのが信じられなかった。私は、それほど酷寒に耐えた人間が、どうすれば熱の作用にも敏感になりうるのかを想像できなかった。しかし、私がした次のような実験が、この疑いや不確かさを晴らした。ある夕方、寒暖計の温度が零下四度まで下がった時、私は少年を裸にしてみたが、彼は服を脱いだことがうれしそうだった。それから私は、彼を外へ連れ出すふりをした。彼の手を引いて長い廊下をいくつも通り抜け、中央学校の正面玄関に出た。彼は、外に出ることにいささかの躊躇も示さぬどころか、ドアか

ら外へ出ようとして私をグイグイ引つ張った。このことから私は、次の二つが両立しなくはないという結論に達した。すなわち、彼は寒いのが平気であると同時に、火のそばで暖まるのも好きなのだ。イヌやネコなどにもこのような傾向があることは、みんなの知る通りである。

ロデスに滞在中、彼は乾燥したアパートで寝起きした。部屋の窓は、彼がガラスを割ったため、窓には布が張られていた。彼は、藁の束が敷きつめられたベッドの上で、布のシートにくるまって寝た。このシートは薄かったが、彼は厳冬の間も寒がることはなかった。私は、手で彼の腕や脚に触ってみて、つねにほんのりと温かさを感じたので、彼が寒くないことを確認できた。また私は、彼が休息する時には、両手を握って目にあて、膝を折って、そこに顔をもつていくことにも気づいた。

こうした一連の事実や観察は、単純で些細なことに見えるかもしれないが、特筆すべきことだけを記した概要では、漠然とした不完全な知識しか与えることができない。細かな詳細のほうが、正確で厳密な考えを提供する。

眠りはとても浅く、ドアを少し揺らしただけでも、目が覚めた。南風が吹く時には、夜の間、彼が時折大笑いをし、苦しみや喜びとは異なるなんとも表現できない声をあげるのが聞こえた。

彼はいつもは、夜明けに目が覚め、そのあと座ったまま、頭からすっぽりシートにくるまり、時に体を揺さぶり、食事の時間までまどろみを繰り返した。朝のこの時間はいわば遊びの時間のようで、彼は起きて来ることも、部屋から出て来ることもなかった。

遅くとも九時には、部屋のドアが開けられ、世話役のアパートに行った。彼にはライ麦パン、焼いたジャガイモ、クリ、クルミ、エンドウ豆、なまのソラ豆が出された。寒い時には、一時間ほどサルのように膝を抱えてうずくまって体を温めてから「原註 現在は自分から椅子に座る」、自分の部屋に戻り、昼食までの時間をそこで過ごした。

一一時頃にとる昼食は、スープとパンで、それに少量の肉か、ジャガイモやインゲン豆がついた。通常飲んでいたの

は水で、いまでもブドウ酒は拒んでいる。

スープを食べている時やほかの時に、自分の手の指、あるいは体のほかの部分が濡れると、彼は布切れで拭くかわりに、そこに灰をかけた。彼の本能にとつて、そこを乾かすにはそれで十分であった。

昼食後には時々、彼を散歩に連れ出すことがあった。冬は、火のそばにいた。毎日二時頃に、パン、クリ、ジャガイモか野菜を食べた。このおやつのと、莢をむくべきインゲン豆がない時には、部屋に引つ込み、藁の上に横になってシートにくるまり、体を揺すっているか、あるいは夕方の六時まで眠るかした。

スープは、肉入りのこともあったし、野菜入りのこともあった。毎度の食事には、ジャガイモ、インゲン豆とソラ豆が出された。

就寝の時間が来ると、なにも彼を引きとめることができなかった。彼は燭台を手にとり、部屋の鍵を指差した。彼に従うのを拒んだりするものなら、怒りの発作が始まった。

彼は毎日一キロのライ麦パンと同量のジャガイモや野菜を食べた。

冬の間の彼の衣服は、シャツ、カルマニョール服〔訳註 南フランス起源の広襟で短い上着〕、膝までのベチコートであった。冬の間中も、頭も足もむき出しだった。寝る時は、昼間着ていた衣服を脱いで、夜用のものに着替えた。

このような生活は、彼の発達と健康にとつて好ましいように見える。ロデスにいるうちに、彼はかなり成長した。体が丈夫になり、かかったのはしつこい風邪と軽い体の不調だけだった。

彼は、サンタフリックから到着した頃には、用便がしたい時にはとこまわずにした。現在は、必要に迫られた時には、ドアを開けてほしいというしぐさをし、開けてやると、外に出て、中庭やしかるべき場所に行く。彼はよく咳をするが、痰を吐くことはまったくない。

註

(1) ボナテールの報告は、Bonnetre, P.-J. (1800) *Notice historique sur le sauvage de l'Aveyron, et sur quelques autres individus qu'on a trouvés dans les forêts, à différentes époques.* Paris : Pancoucke. オリジナルはフランス国立図書館のデジタル・アーカイヴ (Gallica) からダウンロードできる。アヴェロンの野生児に関する当時の主要文書や文献を集めた Gineste, T. (2010) *Victor de l'Aveyron : Dernier enfant sauvage, premier enfant fou* (Nouvelle édition). Paris : Pluriel に、ボナテールのこの報告も収められている。

(2) ヴィクトールという名は、一七九六年に出版されたデュクレイ・デュニニル (François Guillaume Ducrey-Duninil) の小説『森の子、ヴィクトール (Victor, ou l'enfant de la forêt)』の主人公の名にちなむ。この小説は、森に遺棄された男の子がある男爵に拾われ成長してゆく物語である。当時、ピクスレクール (René Charles Guilbert de Pixécourt) によって芝居にもなり、パリでの公演は大当たりをとっていた。ロデス時代には、ボナテールは、自分と同じジョゼフ (Joseph) という洗礼名をこの少年に与えていた。

(3) Iard, J.-M.G. (1801) *De l'éducation d'un homme sauvage ou des premiers développements physiques et moraux du jeune sauvage de l'Aveyron.* Paris : Goujon Fils. Iard, J.-M.G. (1807) *Rapport fait à son excellence le Ministre de l'Intérieur, sur les nouveaux développements et l'état actuel du sauvage de l'Aveyron.* Paris : Imprimerie Impériale. 後者の第二報告は、提出が一八〇六年、公刊は翌年である。この二つの報告を取めた邦訳は『新訳アヴェロンの野生児——ヴィクトールの発達と教育』(中野善達・松田清訳、福村出版、一九七八)。イタールは、一八〇六年の第二報告をもって、五年半続けたヴィクトールの教育に終止符を打った。これは、彼が思春期に入って粗暴になり、教育の成果がまるで見込めなくなったことよっている。ヴィクトールは、聾啞学校の時に世話を担当していたゲラン夫人 (Madame Guérin) がその後も聾啞学校近くのアパートで一緒に生活しながら世話をし(国から養育費が支給されていた)、一八二八年に亡くなった(享年は四〇歳ほどと推定される)。一八〇七年以降はどのような状態であったか、記録は残されていない。(4) 映画の邦題は「野生」ではなく、「野性」と表記している。この映画では、トリュフォーは監督を務めただけでなく、イタールの役も演じた。トリュフォーにとって、それだけ思い入れの強い作品だったと言える。彼自身親から捨

てられ非行に走っていた時に、映画評論家のアンドレ・バザン (André Basin) の庇護を受けて立ち直り、映画の道に進むことができた。彼は、自分たちの関係をヴィクトールとイタールの関係に重ね合わせていた。これについては山田宏一『トリュフォー、ある映画の人生』(平凡社、二〇〇二)を参照。なお、映画は基本的にイタールの報告等にもとづいて製作されているが、もちろん脚色もある。本稿でとりあげている、少年がパリで人間観察者協会のシカールの手に引き渡されるまでの期間だけに限ると、アヴェロンの野生児の新聞記事を読んで大きな関心を寄せた医師イタールが、彼をパリに呼び寄せるよう依頼の手紙を書き、ピネルとイタールが一緒に少年を迎え、彼の診断をしたという設定になっているが、そうではない。イタールが少年と関わり始めるのは、パリ到着から四カ月後の二月初めのことである(彼が正式に聾啞学校付きの医師になるのは二月三日のことである)。

(5) Boyle, T.C.(2010) *Wild child*. New York: Viking. フランス語版は *L'Enfant sauvage* (Paris: Grasset, 2011)。

(6) イタールの第一報告とボナテールの観察報告は、革命暦(共和暦)で記されている。革命暦は一七九三年一月から一八〇五年二月まで使われていた。

(7) 中央学校 (école centrale) は、フランス革命後、理想主義的な教育理念にもとづいて、各県の県庁所在地や主要都市に設けられた中等・高等学校である。一七九五年に創設されたが、七年後の一八〇二年に廃止されている。ロデスの中央学校は、一六世紀末に建てられたイエズス会の学校(コレージュ)であった建物がそのまま使われた(写真2参照)。中央学校廃止後も、王立のコレージュ(王政復古時)やりせとして使われ、『昆虫記』で世界的に有名な(ただし本国フランスでは知る人の少ない)ファープル (Jean-Henri Fabre) もこの建物で学んだ。建物は一九七五年に解体され、いまは付属の礼拝堂が残るのみである。Balser, C. *Rodez il y a 100 ans*. (Praceq: Editions Patrimoines et Médias, 2012) に于て。

(8) イタールの第二報告にも、少年が「アヴェロンの貧しい農民 (un pauvre paysan) によって世話を受け、パリに連れて来られた」という記述がある。おそらくイタールは、少年をロデスで養育しパリに連れて来た人間と、ボナテールとを別人だとみなしていた。というのは、第一報告では、「博物学者ボナテール」と明記して、その報告への言及があるからである。

(9) 本稿のボナテールの生涯についての記述は以下の二つの資料にもとづいている。Affre, H.(1881) *Biographie*

aveyronnaise. Rodez : H. de Broca, pp.63-65; Tap, J. (1997) Pierre-Joseph Bonnatte (1751-1804). *Revue du Rouergue*, no.49, 205-224.

(10) たとえば、魚類の巻は、序文と本文が二段組みでそれぞれ五五ページと二一五ページ、図版が一〇二ページ、総ページにして三七二ページある。なお、*Tableau encyclopédique et méthodique* のボナテールの担当した巻のオリジナルは、フランス国立図書館のデジタル・アーカイブ (Gallica) や Biodiversity Heritage Library のホームページなどからダウンロードできる。どの巻も図版が美しいが、これを担当したのは、挿絵画家ロベール・ベルナル (Robert Bernard) であった。ベルナルは、パンクートの出版物の動植物の絵、一万七〇〇点を描いたと言われている。

(11) Doig, K.H. (2013) *From Encyclopédie to Encyclopédie méthodique: Revision and expansion*. Oxford: Voltaire Foundation.

(12) サンテステーヴの炯眼がなければ (すなわち、野生児の学術的重要性を理解してサンタフリックの養護院に保護し、そのことを上に知らせることがなければ)、この少年は歴史に残ることはなかったかもしれない。少年に関する口述以前の経緯とサンテステーヴについては、一八七五年にフルキエ＝ラヴェルヌ (Fouquier-Laverne) が出した小冊子に詳解がある。これは、一九九二年にロデスで開催された展示会「アヴェロンの野生児」に際して編集・刊行された *L'Enfant sauvage de l'Aveyron* (Rodez: Mission départementale de la culture, pp.126-135) に再録されている。

(13) リヨン逗留中には、リヨン中央学校の博物学の教授、ムートン＝フォントニユ (Marie Jacques Philippe Mouton-Fomelle) が少年に会い、観察記を残している。それによると、「少年の見かけはふつうの子どもとまったく変わらない」。しかしその性格は「利発さと愚かさ、活発と不活発、喜びと悲しみが混ざり合っていて、その原因がなにであるのかを見抜くのが難しい」とも述べている。前掲の Giusti (2010) に収録されている。

(14) デュパティ (Emmanuel Dupaty) による喜劇 *Le Sauvage du département de l'Aveyron, ou Il ne faut jurer de rien*.

(15) 当時の哲学者 (思想家) が「野生人」をどのように見ていたかについては、次の論考に詳しい。松田清 (一九七八) 「ルソーの野生人について」。思想、六月号、二〇九-二二二。

(16) Pinel, P. (1800) *Rapport fait à la Société des Observateurs de l'homme sur l'enfant connu sous le nom de Sauvage de l'Aveyron*. 邦訳は、レイン「アヴェロンの野生児研究」(中野善達訳編、福村出版、一九八〇)と、イタール『新訳アヴェロンの野生児——ヴィクトールの発達と教育』(中野善達・松田清訳、福村出版、一九七八)に付録として収め

られている。

(17) ボナテールの報告については、前掲の Gimeste (2010) のほか、ロジャー・シャタック (Roger Shattuck) とアンドリアナ・ベンザクエン (Andriana S. Benzanguen) が公正に評価している。Shattuck, R. (1980) *The forbidden experiment: The story of the wild boy of Aveyron*. New York: Farrar Straus Giroux. 『アヴェロンの野生児——禁じられた実験』生月雅子訳、家政教育社、一九八二); Benzanguen, A.S. (2006) *Encounters with wild child: Temptation and disappointment in the study of human nature*. Montreal: McGill-Queen's University Press.

(18) ボナテールの報告の邦訳には、部分訳と言えるものが二つある。前掲のレインの本には、報告の三〇ページ以降の部分が再録されており、シャタックの本には、報告の随所からの引用がある。

(19) サン＝シモン (Comte de Saint-Simon) は、聾哑学校での最初の三カ月に少年がどうあつかわれたのかを述べるなかで、この学校の校長で、少年をパリに呼び寄せた立役者であったシカールに対して厳しい評価を下している。サン＝シモンによると、神父でもあったシカールは、教育の助けを借りずとも人間は神の存在を認識しようという信念をもち、「自然人」がその証明になると考えていた。シカールは、アヴェロンの野生児がその恰好の例示になると思い、パリに呼び寄せたまではないが、少年は彼の意図していた証明になるようなものではまったくなかった(逆に反証とすることも可能だった)。シカールは少年の養護を放棄し、少年は悲惨な状況におかれた。命令に従わないため、虐待や暴力も受け続けた。イタールが最初に少年に会った時には、少年はこうした虐待後の状態にあったと言うことができ。イタールも第一報告の第一章の冒頭で、次のように書いている。「彼の生活が一変したこと、見物人たちが頻繁にやってきたこと、そして聾哑学校の同年代の子どもたちと一緒に住んでいた必然的な結果としていじめを受けたことが、文明化の望みを消し去ってしまったように思われた」。サン＝シモンの論述の邦訳は、イタール『新訳アヴェロンの野生児——ヴィクトールの発達と教育』(中野善達・松田清訳、福村出版、一九七八)に付録として収められている。

謝辞

ボナテールの生涯に関係する資料の多くは、アヴェロン県立文書館、クロード・プティ (Claude Petit) 氏から教えていただいた。ボナテールの博物学的業績の現代的評価については、新潟大学人文学部准教授の逸見龍生氏からご教示を得た。両氏に感謝申し上げる次第である。